ファッションと産学共同
－「ジャパンファッションデザインコンテストIN山口」実施の事例研究－

Fashion and a cooperation between Industry and the academic world - A case study about the realization of 'Japan Fashion Design Contest in Yamaguchi'

水谷由美子：代表*
岡部泰民**　入江幸江***

Key word：Fashion Contest, a cooperation between industry and the academic world, Association of Yamaguchi Clothing Product, Yamaguchi Prefectural University, International Fashion Fare

Ⅰ　産学連携による山口県立大学大学院国際文化学研究科とファションコンテスト

筆者は1994年度に山口県立大学に赴任して以来，この10年間に地域文化や自然を発想源とするファッションショーを繰り返し実施して来た．1999年に産・学・官連携事業「やまぐち文化発信ショップ　ナルナセバ」が３年間事業として起こり，産学が活発に交流する環境が生まれた．当初は大学だけで実施して来たファッションショーも，３年目には地域の商店街や商工会議所さらに一般市民とのコラボレーションの形が出来てきた．そして６年目には，大学院の設置に伴い上記事業によって，山口市中心商店街における西端，西門前商店街に店舗とサテライト研究室が誕生した．

一般に大学内の研究室に，外部の人が気楽に訊ねて来ることはむずかしいが，商店街に研究室があることで，多くの専門家や一般市民の訪問を受けた．気楽に人が集えるサロン的な機能も，この商店街の中に設置された研究室は担ったのである．当初は山口県デザイン協会山口・防府支部のメンバーや山口生活工芸研究会などがこの事業に参加し，店舗において商品をともに販売していた．

この山口県立大学大学院国際文化学研究科のサテライト研究室においては，研究テーマは地域文化に由来して，「サビエルと大内文化に着想を得た，ファッションや生活小物の商品開発」に決め，主にアパレル商品やＴシャツさらにキャラクター・グッズなどを開発研究した．

マーケットを視野に入れた実践的な商品開発という研究活動には，商店街内の店舗のオーナーばかりでなく，山口県繊維加工協同組合が協力を申し出た．特に，同組合の専務理事であるブルー・ウエイ株式会社取締役工場統括部長の岡部泰民氏（現在，水谷研究室ゼミ生）は，学生への指導や商品開発のサポートを当初から引き受け，上記事業の進展に多大な貢献をした．

この交流の中で，ファッションコンテストを実施しようとする動きが起きたのである．山口県立大学の立場からは，福岡あるいは全国の各地で催されるファッションコンテストに学生が参加することは，経済的にも，参加基盤においても，非常に困難があるということを岡部氏に話した．ナルナセバでの会話が発展して，現在まで継続する産学共同の，ファッション文化および産業の活性化に向けた基盤作りが始まったのである．

1999年の秋に，ジェトロ主催のミニ・Ｌ＆Ｌ事業にやまぐち文化発信ショップの申請が採択されて，筆者は地域のファッション関連の人々とともに，ミッションでスペインのバルセロナ市と山口市と姉妹都市提携を結んでいるナヴァラ州パンプローナ市に出かけた．

以下で岡部氏自身が述べるが，現地大学での講義を受けて，特にバルセロナにおけるデザインの大学教育は，実習面では企業研修に依存している部分が大きく，産学連携のシステムがかなり充実していることが理解された．

岡部氏と筆者はヨーロッパでの実践的教育に感銘を受けたことが元になり，相互協力の体制が生まれ，ファッションコンテスト，そして発展的な形としてのインターナショナルファッションフェアへブース参加の企画・実施さらに衣造形のおける工場実習などが実現したのである．

＊　山口県立大学大学院教授
＊＊　山口県立大学大学院国際文化学研究科２年
＊＊＊　山口県立大学大学院国際文化学研究科１年

山口繊維加工協同組合のコンテスト事業やコンテストからＪＦＤＣのブランドを立ち上げる活動などを，中心的に推進して来た岡部氏は，2002年度から自身の活動をより理論的に位置づけ，その意義を将来に発展させるために，山口県立大学大学院国際文化学研究科に社会人として入学し，2年間研究活動をして来た．本論では，我々の共同作業の推移を記述し検証することを通じて，ファッションを通じた地域文化と産業の活性化を促すことを目的としている．さらに，ＪＦＤＣブランドの元に，ＩＦＦに参加した大学院生入江幸江（デザイナー名：おおうち　あみ）も，自身の体験から商品開発の意義や研究開発の自己検証について以下で記述する．　（文責　水谷）

Ⅱ　山口県繊維加工協同組合とファッションコンテスト

筆者は1974年からジーンズカジュアルメーカー，ブルーウエイ株式会社（本社福山市）の生産部ブルーウエイ（株）PDセンター（山口市）に入社した．それ以来，生産企画室長，工場長，取締役生産統轄部長（県内7工場）を歴任し，30年間，企業の生産管理業務に従事して来た．1999年4月，県内12社加盟の山口県繊維加工協同組合の専務理事に選任されたことによって，山口県の地場産業団体として，地場産業の振興のために行動することになった．

作れば売れるという高度成長期，多品種少量生産の個性多様化期を経て，安い人件費を求めて生産工場の海外移転が進行する産業空洞化時代を迎えた．そのため採算の悪化，若年労働者の不足，受注不安定で組合員企業の閉鎖，廃業が発生した．その結果，活路を求めて海外研修生の受け入れ事業のために，組合脱退を選択する企業も出るなかで，地域地場生産業は活路をどこに求めるのかが，組合および企業生産部門である組合員の課題であった．

1999年6月山口市西門前商店街に商店街の活性化事業として，山口県立大学大学院国際文化学研究科の衣造形研究室を中心とするやまぐち文化発信ショップNaru Naxevaが設立された．山口県文化振興課の仲介によって，筆者はブルーウエイ株式会社及び山口県繊維加工協同組合として，山口県立大学大学院との連携を始めた．やまぐち文化発信ショップが申請し採択されたことにより，1999年10月にジェトロ山口の事業で，スペインのファッション視察ミッションに参加した．この経験が産学連携の先行事例との出会いを作り，また客観的に日本を見る視野を筆者に与えてくれた．学校という機能が持つ豊富な人材と人脈，社会的な影響力を，地域産業活性化のためにもっと連携して有効に活用するべきであると確信した．

ナルナセバでの交流のなかで，「学生がファションの勉強をしても，専門家に対して発表したり，客観的に実力を確かめる機会が近くに無いので自己満足になり空しい」との発言を聞いた．ファッションというジャンルの中では，学校も産業も問題は共通であり，共に活性化することができる事業は，コンテストの地場開催が最も適切であると思い立ったのである．

同業組合の行政的窓口は中小企業団体中央会であるが，そこに地場産業活路開拓，調査実現化事業という全額補助の事業があった．その事業でファッションコンテストを人材育成事業として適用出来ないかと打診したところ，「前例が無いが面白い企画だ応援する」との力強い言葉を得た．脆弱組合である我々にとってまさに天の声であった．

組合理事会ではファッションコンテスト実施のための予算背景として，専務理事報酬を当てることにし，テーマを「メイドインジャパン」にする合意を得た．そして，実行委員会の構成は山口県繊維加工協同組合を中心に産学官の委員とした．実行委員会設立から山口県立大学の水谷由美子教授との連携で企画を進め，名称を「山口新人ファションデザインコンテスト」とした．

一番問題になったのが審査員の先生の選考であった．地方で行うコンテストにクリエーターの参加意欲を強力に促すための心臓部分である．そこで，水谷教授の人脈からファッションモデルでありファションコーディネーターの我妻マリ氏，空間演出家の毛利臣男氏，筆者の取引先からパリコレクションデザイナーの大鳥居幸男氏を選任することができた．この結果コンテストの中核をなす審査員は，国際的な経験が豊富な方々となり，コンテストの枠組みが強力なものとなった．

山口県には繊維産業としての産地物産品がほとんど無く，メーカーの本社も無い．社員を多く抱えたメーカーの生産工場が全県に分布する地域密着型の広域生産産地である．山口県繊維加工協同組合は県北に7工場を持つブルーウエイ株式会社，平生町の株式会社ビッグジョン，豊浦町の山口ボブソン株式会社，宇部市の明石被服興業株式会社，山口市の山口被服株式会社，小野田市の株式会社アーネストなどからなる．これらの企業はジーンズカジュアルメーカーや学校，官庁の制服生産工場が中心であるから，一見個性が無く

表１　繊維製品全体と衣類の輸入浸透率の推移（1997 年～ 2001 年）

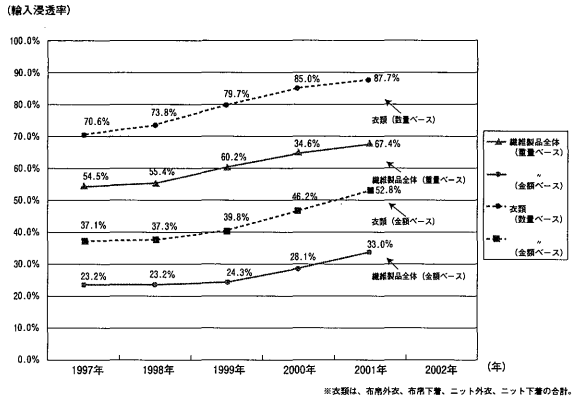
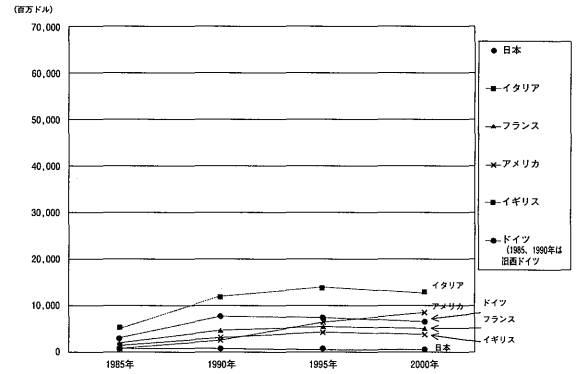


表２　先進各国における衣類の輸出額



活性化が困難に思えた．しかし，「メイドインジャパン」をスローガンに掲げた協力体制ができることは，かえって空洞化を推進しているメーカーの本社が無いことにより可能となった．また，山口が繊維素材産地ではないので，しがらみがなく，どこの紡績メーカーとも連携が出来るメリットがある．さらに全国的に営業展開しているアパレルメーカーに所属している組合員が有るため，繊維産業界のあらゆる部門に広く協力要請が出来ることなどの利点もあった．

テーマを「メイドインジャパン」にしたことによって，なぜ日本で作る必要があるのか，日本製として生き残るためにはどのような条件を満たさなければならないか，との原則的な問題に直面しなければならなくなった．そこで，1994 年に WTO（世界貿易機構）が 2005 年から世界の繊維製品の貿易を自由化するという決定をしたことに注目した．この協定はガット（関税及び貿易に関する一般協定）のウルグアイラウンドを WTO が引き継いで 2004 年末に発効されるものである．このことはまだ一般的に知られておらず，業界における関心も低い状態であった．そこで 2000 年の山口県繊維加工協同組合の総会で，2005 年以降には世界的に日本製が求められ，国内においても見直しされるに違いないと発表した．そして，日本の文化的特徴を持つ商品を生産するためには，日本製として国際競争力を持っている素材産業と連携して，日本文化を表現できる人材育成をすることが必要であるとの共通認識を確認した．それ故に，コンテストは我々の抱えている課題に答えるための条件的には最適な手法であった．

開催地である山口市は中央志向が強く，協調性に富む土地柄であるため，個性的イメージが作りにくい所である．しかし，中世に大内文化が開花した土地柄で，衣生活においては雅な感度が高いという特色を持っている．又，近世においては明治維新発祥の地として時代変革期に問題提起をした，発信能力が内外に認められた地域でもある．

開催地の諸機関がこのファッションコンテスト事業を，地元の活性化策として評価して，実行委員会と連携することが出来れば，地場産業，学校，開催地域の共通の活性化につながるという組合員の共通認識のもとで，山口市，山口商工会議所に打診し連携することになった．

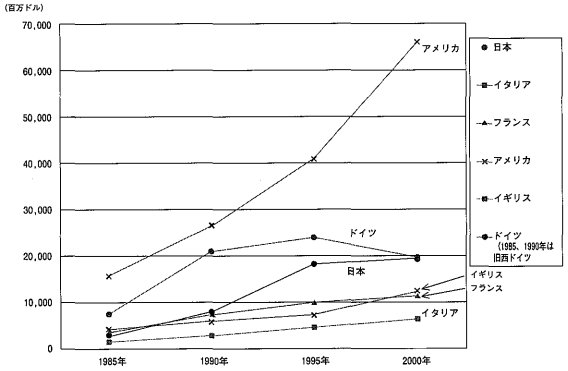
以上の多角的な期待のもとで実現された山口新人ファッションデザインコンテストは，翌年ジャパンファッションデザインコンテスト IN 山口と名称を変え，2003 年 11 月 30 日第 4 回目を開催することができた．ここではこのコンテスト開催事例を検証し，その継続的な経過を比較検討して，今後の地域における経済と文化による活性化活動の一例として，広くその意義を問う．　（文責：岡部）

Ⅲ　コンテスト開催の背景としての日本における繊維衣料品生産の客観的現状

日本の市場に流通している衣料品の数量的な海外生産品の比率は，プラザ合意以後年々増加を続け 2001 年には 87.7％の比率を占めている．しかし，金額的には約 50％を国内生産品が占めており，高付加価値商品が国内生産品で構成されていることが伺われる．(注1)（表１と表３を参照）

国際的な比較では欧州化繊協会の Purvis 理事長がブラッセルにおいて「日本の繊維技術は世界一である(注2)」と発言したことに象徴されるように，高い評価を得ているが，世界の繊維製品貿易に占める我国のシェアは 2％程度であり先進諸国の中でも最低である

図３　先進各国における の輸入額



(注3)．(表２を参照)

これらのことから，素材としてのテキスタイルの優秀性をアピールし，高付加価値商品を創造する人材の育成を図り世界的視野で展開するということが，アパレル生産産業にとっていかに重要であるかがわかる．

(文責：岡部)

Ⅳ　第１回山口新人ファッションデザインコンテストの計画と実施

１　補助事業区分

平成12年　中小企業活路開拓調査・実現化事業

協同組合補助事業として公的支援を得て実現

２　事業の目的

繊維業界は，長引く不況に加え，客単価の低下さらには輸入品の増加等さまざまな要因から業績が悪化している．そして，国内のアパレル産業の空洞化という最大の問題点を抱えている．また，海外アパレル企業との競争が進む中，国内のアパレル産業も大きな転換期を迎え，さまざまな試みが必要となってきた．

今後，人材の流動化は一般化し，いかに優秀な人材を確保するかが企業の将来を決定する．そこで，今回は，組合員企業のパンフレットを作成し，広くPRするとともに，組合員企業の主要生産品及び新作製品の発表等を行うことにより，当業界を理解してもらい優秀な人材の確保を図ることを目的とした．

また，一般公募のデザインコンテストを行うことにより，人材の発掘を行う．これにより，広くアパレル産業の存在を示し，新たな分野への進出を図る．

３　補助事業の実現性と期待される効果

組合員企業の生産する衣料品等については，アパレル業界では特記すべきものであるが，なかなか一般的には理解されていない．また，繊維業界は３Ｋのイメージが強くなかなか山口県内では優秀な人材の確保が難しい．そこで組合ぐるみで広く組合員企業をPRすることにより，コストをあまりかけずに，人材の確保並びに業界の理解を図ることができる．

４　事業計画の内容

○テーマ　地場繊維産業のPR並びに新分野への進出

○事業の実施予定

委員会設置　（７月）

パンフレットの作成（７月）

PR発表会等開催事業（９月～12月）

講習開催（１月）

報告書作成（３月）

５　関連事業

第１回山口ファッションシンポジウム

山口市のファッション文化振興を目的として開催

テーマ：21世紀ファッションを展望する

６　事業計画の経過

2000年１月山口県繊維加工協同組合連絡協議会

事業実施方針の説明．

2000年２月中小企業団体中央会の活路開拓調査，実現化事業計画立案申請

2000年５月山口県繊維加工協同組合理事会，総会実行委員会の設置及びテーマの設定，事業予算計画の説明と承認．

2000年６月14日実行委員推薦依頼書発行

2000年７月３日実行委員委嘱状発行

７　実行委員

山中進作―山口県繊維加工協同組合理事長
　　㈲阿東ユニオン　代表取締役

岡部泰民―山口県繊維加工協同組合専務理事
　　ブルーウエイ㈱　取締役

草刈源治―山口県繊維加工協同組合理事
　　須金産業㈱　代表取締役

桝本郁文―山口県繊維加工協同組合理事
　　明石被服興業　㈱工場長

亀池正雄―山口県繊維加工協同組合理事
　　㈱ビッグジョン　総務課長

藤原英晃―山口県繊維加工協同組合理事
　　ボブソン　山口生産係長

河村　勉―山口県繊維加工協同組合監事
　　山口被服㈱　代表取締役

下鐵太郎―山口商工会議所　副会頭

水谷由美子―山口県立大学　教授

関谷公子―下関文化産業専門学校　教授

世良弥和子―㈲トリニティ　代表取締役
能見忠治―G―PLAN　代表
重見武雄―山口市文化振興課　課長

8　審査委員

毛利臣男―空間演出家
我妻マリ―ファッションコーディネーター
大鳥居幸男―ファッションデザイナー

9　事業実施の経過

第1回実行委員会開催
日時：2000年7月13日
場所：商工会議所5Fコミニュティルーム
①事業趣旨説明
②事業内容説明
③個別事業実施要綱の検討
a　パンフレット作成事業実施日程及び実行計画作成
b　PR・発表会の実施日程及び実施計画作成
募集要項発送：2000年7月16日
教育機関―県内高校，全国の関係専門学校，大学
第2回実行委員会実施
日時：2000年9月7日
場所：ぱるるプラザ山口3F会議室
①事業経過報告
②個別事業の経過と今後の進行について
a　パンフレットの作成事業の経過と配布実施計画
b　PR・発表会事業の経過と今後の実施日程と具体的内容について
一次審査実施
日時：2000年9月30日
場所：東京FIOにて
出席者：毛利臣男，我妻マリ，大鳥居幸男，
　　水谷由美子，岡部泰民
応募参加：大学6校，専門学校13校，
　　高等学校9校，作品点数956点
第三回実行委員会開催
場所：2000年11月2日
場所：ぱるるプラザ山口3F会議室
①事業経過報告
②個別事業の経過と今後の進行について
a　パンフレット配布とその効果について
b　PR・発表会事業の経過と実施日程と細部の役割確認について
c　講習会事業の日程と実施計画について
山口新人ファッションデザインコンテスト最終審査会開催
場所：2000年12月3日
場所：ぱるるプラザ山口
審査作品：119点
来場者：約650人
2001年3月22日第4回実行委員会開催
場所：ぱるるプラザ山口3F会議室
①　事業結果報告
②　個別事業の結果と総括
a　パンフレット作成事業について
b　PR・発表会事業について
c　講習会事業について
d　各事業の今後の展開について

10　関連事業

山口ファションシンポジウム開催
日時：2000年12月2日
場所：山口市民館
パネラー：毛利臣男，我妻マリ，大鳥居幸男
コーディネーター：水谷由美子
企画：岡部泰民
2001年2月21日講習会開催
場所：セントコア山口2Fホール
参加人員39名
講師：山口県立大学，水谷由美子教授
テーマ：ファッションを通じた産学共同の推進

11　結果

山口でのファッションデザインコンテストは初めての試みで知名度も無かったが，発表の機会を待望していた山口県内及び近県の学生応募が多く集まった．その反響に業界，地元の認識も変わり次回開催の要望が強く求められた．審査員から開催規模とクオリティの高さを評価され改名するよう提案があり，次回からジャパンファッションデザインコンテスト IN 山口に名称を変えることにした．課題としては高校生の作品は自由奔放なアイデアで面白いものがあったが，非現実なものが多く厳しい指摘を受けた．

V　第2回ジャパンファッションデザインコンテスト IN 山口の計画と実施

1　補助事業区分

地域人材確保・養成事業
平成13年地場産業総合振興事業（山口県商工労働部経営金融課）として公的支援を得て実現

2　事業の目的

繊維業界は長引く不況に輸入品の増加による空洞化

が進む中，ものづくり現場の存在感をアピールし成長分野であるデザインを中心に高い感性表現による付加価値を追及し産・学・官による次世代の人材を育成すること．さらに地場産業のPR並びに新分野への進出をテーマとする．

3　事業内容

①　山口県繊維加工協同組合が実施主体になり実行委員会を設置

組合員企業を中心に，産・学・官機関の委員で構成する．

②　PR，発表会等開催

全国的に地場産業として存在感をアピールするとともに，ネットワークを形成し情報交流を活発にする．同時に関連する異業種との連携を深め共にレベルアップを図る．国際的な講師を招き講習をする．

③　報告書作成

4　関連事業

第2回山口ファッションシンポジウム

山口市のファッション文化振興を目的に開催

テーマ：21世紀ファッションの展望－山口ファッション文化の創造と発信

日時：2001年11月17日

場所：山口市民会館小ホール

パネラー　毛利臣男，我妻マリ，大鳥居幸男

コメンテーター　福田百合子，田村幸志郎

コーディネーター　水谷由美子

企画　岡部泰民

講習会開催

日時：2002年3月28日

場所：セント・コア山口

講師：水谷由美子　山口県立大学教授

テーマ　ファッションを通じた産・学共同の推進

5　事業計画の経過

2001年2月山口県繊維加工協同組合連絡協議会開催

事業の実施方針を確認

2001年4月地場産業総合振興補助金交付申請

山口県商工労働部経営金融課

2001年5月山口県繊維加工協同組合理事会，総会

実行委員会設立とテーマの設定，事業説明及び予算説明と承認

2001年6月実行委員委嘱状発行

6　実行委員

山口県繊維加工協同組合関係者は前回と同様

下鐵太郎―山口商工会議所　副会頭

水谷由美子―山口県立大学　教授

関谷公子―下関文化産業専門学校　教授

世良弥和子―(有)トリニティ　代表取締役

能見忠治―G―PLAN　代表

内田武義―山口市文化振興財団　常務

7　審査委員

毛利臣男―空間演出家

我妻マリ―ファッションコーディネーター

大鳥居幸男―ファッションデザイナー

8　事業実施の経過

第1回実行委員会開催

日時：2001年6月29日

場所：ニューメディアプラザ6F雇用能力開発機構山口センター会議室

ジャパンファッションデザインコンテストIN山口開催について

2001年6月応募要綱作成，配布

配布対象：山口県内の全高等学校，専攻課程を有する全国大学及び専門学校，協賛，後援団体，

一次審査実施

日時：2001年9月20日

場所：東京FIO

出席者　毛利臣男，我妻マリ，大鳥居幸男，水谷由美子，岡部泰民

応募参加：大学8校　専門学校14校　高校9校　企業7社　作品点数1486点

第2回実行委員会開催

日時：2001年11月12日

場所：ニューメディアプラザ6F雇用能力開発機構山口センター会議室

事業経過報告，委員の役割分担

第2回ジャパンファションデザインコンテストIN山口最終審査会開催

日時：2001年11月18日

場所：ぱるるプラザ山口

参加作品：97点

来場者：約700人

ゲスト参加：ノーラ・ニーニコスキー（フィンランド）

第3回実行委員会開催

日時：2002年3月28日

場所：セント・コア山口

結果報告及び総括，第3回開催について

9　結果

今回は九州，中国地方の応募者が多いことが特徴である．そればかりか，北海道，東北からも参加があり，全国的な広がりの手ごたえを得た．この回から課題を

デニムとし，紡績メーカーで日本でのデニム生産を初めて行った倉敷紡績と提携して，素材提供を行うことに成功した．

業界における成果として，求人が容易になったとの報告があった．ゲストコーナーを新設し国際交流と同時に文化の差異を認識し日本的表現との比較が出来た．

課題としては公的支援が50％程度になり自己資金調達が必要になった．それ故に，社会的存在意義に裏付けされた広報効果の強化をして，協賛団体の増加を図らなければならなかった．

デニムをテーマにした作品は，非常に興味深い作品が多く，次回もデニムを素材のテーマにすることを決めた．

Ⅵ　第３回ジャパンファッションデザインコンテスト IN 山口の計画と実施

1　補助事業区分

地域人材確保・養成事業

平成14年地場産業総合振興事業（山口県商工労働部経営金融課）として公的支援を得て実現

2　事業の目的および実施内容の計画

第２回ジャパンファッションデザインコンテスト IN 山口と同様のため省略．

3　事業計画の経過

2002年３月山口県繊維加工協同組合連絡協議会開催事業の実施方針を確認

2002年４月地場産業総合振興補助金交付申請

山口県商工労働部経営金融課

2002年５月山口県繊維加工協同組合理事会，総会実行委員会設立とテーマの設定，事業説明及び予算説明と承認

2002年６月実行委員委嘱状発行

4　実行委員

山口県繊維加工協同組合関係者は前回と同様．

下鐵太郎―山口商工会議所　副会頭

水谷由美子―山口県立大学　教授

関谷公子―下関文化産業専門学校　教授

世良弥和子―（有）トリニティ　代表取締役

内田武義―山口市文化振興財団　常務

渡壁　敏―山口県商工労働部経営金融課

5　審査委員

毛利臣男―空間演出家

我妻マリ―ファッションコーディネーター

大鳥居幸男―ファッションデザイナー

6　事業実施の経過

第１回実行委員会開催

日時：2002年６月20日

場所：ニューメディアプラザ６F 雇用能力開発機構山口センター会議室

議題：ジャパンファッションデザインコンテスト IN 山口開催について

応募要綱作成，配布

日時：2002年６月10日

配布対象：山口県内の全高等学校，専攻課程を有する全国大学及び専門学校，協賛，後援団体

一次審査実施

日時：2002年９月28日

場所：東京 FIO

出席者：毛利臣男，我妻マリ，大鳥居幸男，水谷由美子，岡部泰民

応募参加：大学８校　専門学校30校　高校８校

企業７社　作品点数972点

第２回実行委員会開催

日時：2002年11月11日

場所：ニューメディアプラザ６F 雇用能力開発機構山口センター会議室

議題：事業経過報告，委員の役割分担，

第２回ジャパンファションデザインコンテスト IN 山口最終審査会開催

日時：2002年11月18日

会場：ぱるるプラザ山口

参加作品：93点

来場者：約750人

ゲスト参加：ナオト・ニイドメ（フィンランド），山崎忠道，高畠海，出本正彦，百田公子

第３回実行委員会開催

日時：2003年３月28日

場所：セント・コア山口

議題：結果報告及び総括，第３回開催について

講習会開催

日時：2003年３月28日

講師：水谷由美子（山口県立大学教授）

テーマ　ファッションを通じた産・学共同の推進

7　結果

専門学校の参加が14校から30校と倍増した．地域は関東以北の参加が目立ったが近畿地区は減少した．入選者への素材提供がデニムの生産量が世界一のカイハラ株式会社との連携により成功した．デニム課題の

コンテストとして業界内の認知度が高くなった．資金不足から応募料を徴収することにした為に，精鋭化してレベルが高くなった．地元の学生の入賞が比較的困難になった．負担の発生から高校生の参加数が大幅に減少した．地域対策をするかレベルアップを進めて行くかの議論があったが，自立化を進めるには存在感のあるものにしないと継続が困難になるとの結論になった．

Ⅶ　第４回ジャパンファッションデザインコンテストＩＮ山口の計画と実施

1　補助事業区分

地域人材確保・養成事業

平成15年地場産業総合振興事業（山口県商工労働部経営金融課）として公的支援を得て実現

2　事業の目的および実施計画

第２回および第３回と同様のため省略．

3　関連事業

① 第８回インターナショナル・ファッション・フェア（ＩＦＦ）に参加，次章で詳細を述べる．
ファッションブランドＪＦＤＣ（ジャパン・ファッション・デザイン・コンテスト）を立ち上げる．
ゲスト，受賞者，地域デザイナーから６名を選び作品48アイテムを出展

② ファッションモデル育成事業として，公募，審査，認定

③ 第７回ジャパン・クリエーション（東京）に上位入賞４作品の展示参加
日時：2003年12月３日～５日
場所：東京ビックサイト
ブース：コットン・サービスセンター

④ コットンインコーポレイテッドのファッション会議で当コンテストが紹介される
日時：2004年２月
場所：ニューヨーク

4　事業計画の経過

2003年３月山口県繊維加工協同組合連絡協議会開催
事業の実施方針を確認
2003年４月地場産業総合振興補助金交付申請
山口県商工労働部経営金融課
2003年５月山口県繊維加工協同組合理事会，総会
実行委員会設立とテーマの設定，事業説明及び予算説明と承認
2003年６月実行委員委嘱状発行

5　実行委員

草刈源治―山口県繊維加工協同組合理事長
須金産業（株）代表取締役
岡部泰民―山口県繊維加工協同組合専務理事
ブルーウエイ（株）取締役
冨金原通宏―山口県繊維加工協同組合理事
明石被服興業（株）工場長
亀池正雄―山口県繊維加工協同組合理事
（株）ビッグジョン総務課長
藤原英晃―山口県繊維加工協同組合理事
ボブソン山口生産係長
河野通朋―山口県繊維加工協同組合理事
（有）コーノマーク取締役
河村　勉―山口県繊維加工協同組合監事
山口被服（株）代表取締役
下鐵太郎―山口商工会議所　副会頭
水谷由美子―山口県立大学　教授
関谷公子―下関文化産業専門学校，教授
世良弥和子―(有)トリニティ，代表取締役
内田武義―山口市文化振興財団，常務
渡壁　敏―山口県商工労働部経営金融課

6　審査委員

毛利臣男―空間演出家
我妻マリ―ファッションコーディネーター
大鳥居幸男―ファッションデザイナー

7　事業実施の経過

応募要綱作成，配布
日時：2003年６月
配布対象：山口県内の全高等学校，専攻課程を有する全国大学及び専門学校
第１回実行委員会開催
日時：2003年７月11日
場所：セントコア山口２Ｆ会議室
一次審査実施
日時：2003年９月22日
場所：東京FIO
出席者：毛利臣男，我妻マリ，大鳥居幸男，水谷由美子，岡部泰民
応募参加：大学15校　専門学校47校　高校８校
企業７社：1900点
2003年11月17日第２回実行委員会開催（出席委員６名）
場所：セントコア山口２Ｆ会議室
事業経過報告，委員の役割分担
2003年11月29日公募選考ファッションモデル実

技講習会開催
場所：山口商工会議所５F
講師：我妻マリ
特別指導：毛利臣男　大鳥居幸男
実技指導：池レイコ
コーディネーター：水谷由美子
企画：岡部泰民
ジャパンファッションデザインコンテスト IN 山口
最終審査会開催
日時：2003 年 11 月 30 日
場所：ぱるるプラザ山口
参加作品：106 点
来場者：約 800 人
ゲスト参加：天本誠司，林利行，蓬莱美里

8　結果

第４回の結果については，４回分の総括的に以下のＸ章「コンテスト実施の結果概要」に記す．

Ⅷ　コンテストの関連事業（中小企業団体中央会事業）：第８回インターナショナルファッションフェア IFF に出展

1　ＩＦＦ参加概要

事業名　活路開拓・調査実現化事業
日時：2003 年７月 23 日－25 日
場所：横浜みなとみらい
展示企画：（有）ナルナセバ
アートディレクタ：水谷由美子
ブース空間デザイン：ナオト・ニイドメ
企画コンセプト：大鳥居幸男，板倉啓司
事業企画：岡部泰民
参加デザイナー:下澗佳世子，林利行，ノーラ･ニーニコスキー，ピーア・リンネ，ナオト・ニイドメ，山崎忠道，おおうち あみ
2003 年９月 JFDC ブランドを北九州市の井筒屋にて販売開始

2　ナルナセバの活動　－　第８回ＩＦＦに参加して

「ナルナセバ」のデザイナーとして，2003 年７月 23 日～25 日パシフィコ横浜で開催された「第８回インターナショナル・ファッション・フェア」で展示・商談会の場を提供していただく機会に恵まれた．この参加が決定したのは会期１ヶ月前の６月初めだった．素材はデニムで，それを筆者の専門である編物の領域で創作することが条件である．非常にタイトなスケジュールで取り組むことになった．

水谷研究室では，2002 年度から積極的にフィンランドとデザイン交流をしていて，今回のＩＦＦ参加デザイナー６人組の内，２組がフィンランドの若手デザイナーであった．筆者は「引き裂きニット」の技術を試しつつ，若者向けの新しい感覚の作品を制作しようと考えた．水谷教授に相談したところ，日本には「裂き織り」またフィンランドには「ホッパナ織り」の伝統がそれぞれあり，日・フィンの布の裂き織りの伝統に学びながら，それを編物の分野に敷衍させてやってみるのはおもしろいのではないかと助言を受けた．

そこで最終的に山口から，デニムの引き裂き織りでなく，裂いた布を編むことで，独自なファッションを発信しようと考えた．ＩＦＦへの参加デザイナーの課題は，素材がすべてデニムということであった．使用可能なデニムは，綿の綾織だけでなく，合成繊維も含まれていた．また，厚手だけでなく，軽く薄いデニムもあったので，一番カットしやすく，また編んだときに厚くなりすぎないデニムを選び，カット幅の研究をした．はさみで切ろうとすると大変な苦労と時間を要し，また裁断の際にでるほこりにも悩まされた．また，カットしたデニムを柔らかくするために，何度も洗い，編みやすい柔らかさまで，洗濯を繰り返した．

最初のデザイン・アイテムはタンクトップを選び，編地はドライブ編みにした．１枚のタンクトップを編み上げた時に，仕上げの様子が分かり，そこから次々に作品イメージが湧いてきた．編む内に，編みやすい生乾き状態も発見することができた．ほこりと戦いながらの作品作りも素材の生乾き状態で解消され，編んでいる気分も爽快になった．

次に，キャミソールドレスを制作することにした．この作品のために選んだデニムは，化学繊維の混紡だったので，洗うとほつれ糸が長く出る．それ故に，編み上げたときには，メリヤス編みには見えない．そこで，モノトーンのこの作品は，大人らしいエレガンスを追求しながらも，斬新さを出すためにヘムライン（裾線）はアシンメトリーにした．

当初，「インターナショナル・ファッション・フェア」がどのような規模で，またどのような「モードとビジネスの交差点」なのか，まったく認識していなかった．筆者は，参加に関してはただ流れに任し，完成度の高い作品を制作する事に専念していた．そして，デニムとクリエーターの感性が融合した作品を持って，横浜の会場に行った．ＩＦＦの会場に着いて，一般の体育館の２倍くらいはある会場の準備風景を見たとたん，思わず足がすくんでしまった．この会場であるパシフィコ横浜に来たのは初めてだった．そこで，第８

回のＩＦＦの会場には世界21カ国の地域から436社・団体が出展し，日本からは375社・団体が参加していることを知った．カテゴリー別の内訳は，バッグ・シューズ・アクセサリーグッズ131社，ヤングカジュアル76社，レディースウエア60社の出展だった．目を見張る規模とファッションの総合的な展示会であることを認識した．

会場をブースで分け作品を展示するのだが，それぞれのブースには個性が溢れているように感じられた．各ブースで熱のこもった商談が繰り広げられるのだから，空間作りにも気合が入るのも納得できる．山口県繊維加工協同組合が，このブースを企画出展し，我々６組のデザイナーをデビューさせてくれた．クリエーターを産業界が支援して下さって実現した，今回の出品について，非常に大きな喜びを得た．さらに，上記組合の専務理事である岡部泰民氏が「不景気な時こそ人材育成が必要．産業界が若いクリエーターを支えるべき」と話されていたことに，感銘を受けるばかりか，責任の重さをも感じた．

改めて時間がなかったと言い訳を言いたい自分に渇を入れた．このような大舞台に立つことが出来たことを奇跡とも感じつつ，他のブースを見て回りながら，次の創作へのファイトが沸いて来て，自分の自信過剰さに少々自ら苦笑した．

今回のフェアでは，バイヤーのみが対象の「売れそう」「自社で扱いたい」などの視点でベスト10を選ぶイベントも開催されていた．残念ながら，我々のブースからは選ばれなかった．テクニックにこだわりがあるものの，シンプルな仕上げでトレンドを盛り込んだ，カジュアルな普段着が人気を集めていたようだ．会場を埋め尽くす作品の数々，アピール合戦，最先端の技術，感性のぶつかり合いなどを見て，創造力は無限だと感じさせられた．

服と人の関係は時代の変化に伴い，確実に変化している．ファッションはどのように変わって行くのかを読みとるためには，ファッションを取り巻く社会的，文化的な環境の変化に敏感にならなくてはいけない．また，大量消費型のものづくりが限界を迎える現在，個性あるグレードの高いものを求める動きも広がっている．一方で，形の斬新さだけを追求するのではなく，時代の気分に同調させ，微妙な分量バランスで個性を出すという傾向もある．流行に追われながらもその時代に求められている作品で勝負するのも挑戦者としては醍醐味であるが，スタイルで残ることはデザイナーとして最高の喜びであろう．

今回のフェアに参加して，一皮向けたような実感がある．筆者にとっては，この大イベントに参加できたことが，まず今後の創作活動に何よりの財産である．社会人大学院生である自身の作風も，少し柔軟に時代に対応し，若者の発想や感覚を取り込んで行く必要があると感じた．その上で，人の体に合わせる服作りではなく，服を着ることにより体を美しく見せる事ができる作品ができれば最高である．この経験からマーケットをも意識しつつ，個性的なアイディアを形にできるようなデザインを考えて行きたい．（文責：入江）

Ⅸ　ジャパンファッションコンテスト IN 山口と他のコンテストとの比較

1　コンテスト開催の有効性

①　地方で行う事業はイベント効果が持続するので，継続することで歴史的事業となる可能性がある．

②　コンテストは文化と経済が融合しないと出来ないので，産・学・官連携事業として協力体制が作れる．

③　募集から開催まで６ヶ月間のアピール期間があり，広報効果が大きくメッセージの浸透に効果的である．

④　コンテストの権威は審査員で決定されるため地方開催でも，不利とはならない．

⑤　開催地として，地元商工業者の異業種との連携ができる．また発信インフラを育成し共有できる．

⑥　事業を通じて人脈の形成が全国的，国際的に展開できる．

2　日本のファッションコンテストとの比較

①　教育機関や教育団体が活性化とレベルアップの為に行う．

①－１－公募型

a　全国ファッションデザインコンテスト，主催杉野学園，開催41回，応募4840点，入選70名

b　NDCフレッシュコンテスト，主催日本デザイナー協会，全国の支部，学生対象

①－２－学内型

a　DSファッション専門学校コンテスト
主催：ディーズファッション専門学校，学校行事

b　CFCファッションコンテスト
主催：中部ファッション専門学校，学校行事

c　香蘭サマーファッションコンテスト
主催：香蘭ファッション専門学校，学校行事

②　自治体，業界団体が地域活性化と産業振興を目的に行うもの

②－１－公募型

a　WFC 国際学生岐阜ファッションコンテスト
主催：WFC 国際学生岐阜ファッションコンテスト実行委員会，開催 10 回，応募 14000 点，入選 50 名
b　神戸ファッションコンテスト
主催：神戸ファッション協会，開催 28 回，応募 654 点入選 28 名
c　ナゴヤファッションコンテスト
主催：ナゴヤファッション協会，開催 22 回，応募 5654 点，入選 39 名
d　ＫＤＫファッションコンテスト
主催：京都服飾デザイナー協会，開催８回，応募 414 点，入選 89 名
e　倉敷ファッションフロンティア
主催：倉敷ファッションセンター（株），開催７回，応募 8967 点，入選 30 名，部門としてデニ ムファッションが有る
f　ファッション甲子園
主催：青森県，開催３回，応募 7733 点，入選 45 チーム（高校生対象）
g　ミカワファッションコンテスト
主催：愛知県，開催 10 回，入選 80 名（三河地区の学生対象）

③企業の文化事業として社会貢献とイメージアップを目的に行うもの
③－１公募型
オンワード新人ファッション大賞
主催:オンワード株式会社, 開催 26 回, 応募 12406 点, 入選 35 名
③－２提携型
a　日清紡ファッションコンテスト
主催：日清紡株式会社，文化学園の学生対象
b　東レファッションコンテスト
主催：東レ株式会社，文化学園の学生対象
④国際的な交流事業として行うもの―公募型
a　ファションクリエーター新人賞国際コンクール，
主催：エールフランス国営航空会社，開催 19 回，応募 3079 点，入選 40 名
b　ATF アジア国際新人ファッションコンペ
主催：㈳トータルファッション協会，開催 26 回，応募 1754 点，入選 15 名

3　第四回ジャパンファッションコンテスト IN 山口の特徴

主催：山口県繊維加工協同組合を中心とし，産学官で構成する実行委員会，開催４回，応募 1900 点，入選 100 名，公募型，素材提供によるデニムコンテスト
テーマ：メイド・イン・ジャパン

現在，素材提供型のコンテストは他に事例が見当たらず，当コンテストはこの点で個性的なものであることがわかった．またデニム素材に限定したコンテストは他になく，倉敷ファッションフロンティアに於いて部門として存在するのみであった．デニムの世界有力産地が日本であるためか今までの調査では世界的にも例が見られない．人材育成に重点を置いた入選者数 100 名は業界，産地主催のなかで最も多いものであった．さらに時代の共通問題をテーマにしたために，注目度が高く異業種との連携が容易となった．

X　コンテスト実施の結果概要

ファッション産業は文化の産業化もしくは産業の文化化によって成立する産業であり，そこには背景となる国，地方の文化による差異が当然反映される．情報伝達の発達により，グローバル化が進行する世界においてお互いに認め合うことが必要である．2000 年から「メイド・イン・ジャパン」のテーマで事業を開催してきたが，参加教育機関数は第１回が 28 校，第２回が 31 校，第３回が 46 校，第４回が 70 校と増加し，地域も北海道から沖縄まで広がった．

素材の課題を第２回から「デニム」とした．第２回コンテストを開催した時に実施したアンケートで，参加学生に「デニムの生産量および品質で世界一はどこの国と思うか」という質問をした．その結果，ほとんどがアメリカ合衆国と解答し，日本のデニムが質量ともに世界一であることを知らなかった．幸いにも第４回開催時では日本と答えた者が 100％だった．これを通してコンテストを通じたメッセージの伝達効果の大きさに驚いた．

2002 年にイトーヨーカ堂がメイド・イン・ジャパンの企画を発表し，2003 年にはスズキ自動車が同テーマをバイクのコンセプトとして打ち出した為に，経済界の話題として「メイドインジャパン」というキーコンセプトはスポットライトを浴びることになった。2003 年には雑誌「経済界」にも，当コンテストが取材され，掲載された．

第２回目から審査時間に，外国から若手デザイナーを招待し，ショーと解説の時間を設けた．第２回目にノーラ・ニーニコスキー（ヘルシンキ芸術デザイン大

学大学院２年生，ベネトン本社でニットデザインの経験を持つ．現在は新進気鋭のデザイナーとしてヘルシンキにて活躍中），３回目にはナオト・ニイドメ（ヘルシンキ芸術デザイン大学ファッション専攻３年生，同時にインテリア・建築専攻大学院２年生，2002年フィンランド若手イヤー・オブ・ザ・デザイナーに選ばれる．2005年春夏からマリメッコの婦人服のデザイナーに就任）両氏を招いた．インダストリアルデザインの領域では，世界に誇るフィンランドにあって，彼らが所属する大学教育は，１点ものではなく，工業生産を前提とした発想法からのファッションデザインであり，聴衆に新鮮な情報を提供できた．

さらに，第４回目には繊維の見本市であるジャパンクリエーションに参加している，コットンインコーポレーテッド東アジア事務所とのコラボレーションにより，上位４作品の展示をした．さらに第４回の当コンテストの入賞作品の写真が，アメリカ合衆国で2004年２月に実施されたコットンインコーポレーテッドのデザイン会議にて，プレゼンテーションされた．

山口県繊維加工協同組合にとって，このコンテストを継続して来て画期的なことは，当組合のブランドＪＦＤＣを立ち上げ，第８回IFF（インターナショナル・ファション・フェア）に参加したことである．さらにそこで開発した商品を小倉の井筒屋で販売を行った．この一連の流れが構築出来たことは，３年間に渡ってコンテストを継続して来て，このコンテストの運営が単に一過性のイベントを目的とするのではなく，確実に産業界の活性化を目指すものであることの証左となる．

さらに，第４回目からは，地元のファッション産業関連のインフラを整備するために，ファションモデルの公募を行った．書類による１次選考を行い，８名のモデルを選び，実行委員会がＪＦＤＣモデルとして認定した．

事業が全国的な規模に成長し，広く関係者の間で認知されて来た大きな要因に，メディアの存在を上げる必要があるだろう．まず，テレビ局ではNHK山口放送局，TYSテレビ山口，YAB山口朝日放送，KRY山口放送，山口ケーブルビジョンなど，次にラジオ局ではNHK山口放送局，FM山口などが取材し，広く広報した．さらに新聞では業界全国紙の繊研新聞，アパレル工業新聞，経済紙の日本経済新聞，山口経済レポート，一般紙では毎日新聞，読売新聞，朝日新聞，中国新聞，山口新聞，山口日日新聞など，ミニコミ紙ではサンデー山口，週刊やまぐちなど，経済誌では経済界，広報誌ではブラザー縫製ジャーナル，公募ガイド，山口商工会議所会報，山口中小企業団体中央会会報，山口文化振興財団エニーなどが，事前の応募から事後報告までさまざな形で記事にした．

特に，インターネットサイトは，主催地の地域を越えて，全国からアクセスがあった．たとえば，ジャパンデザインネットやヤフー，さらに学校案内では香蘭ファッション専門学校や入選者を出した学校のホームページが同コンテストの結果を掲載していて，年々インターネットの影響力が大きくなっていると理解できる．

このような発展を遂げつつあるジャパンファッションデザインコンテストIN山口がもたらした波及効果は以下のようである．

1　山口繊維加工協同組合の場合

①　募集活動を通して学校と円滑なコミニケーションがとれ，出入りがスムーズになった．（学生服）

②　求人活動に役立ち入社希望者が増えた．

③　東京方面の受注商談の際，技能レベルの高い県との印象を持たれ円滑に成立した．

④　山口県繊維加工協同組合と大手商社の間に取引口座の開設が出来た．

⑤　メイド・イン・ジャパン啓蒙運動の先駆的団体として，中央の経済誌，業界紙に大きく取り上げられ，イメージアップに繋がった．

⑥　地元の企業として評価が高くなり商品の開発相談や受注が増加している．

2　地域諸機関の場合

①　山口商工会議所の街活性化委員会との連携活動が活発になり，地域活性化をファッション，大内文化など文化のテーマで進めている．

②　理美容の若手デザイナーのスキルアップや活性化を連携して推進している

③　地域の高校生や大学生のファッションに対する関心が高まる，と同時に能力が向上している．

④　イベントを通してグラフィック・デザイン，ビジュアル・デザインの業者の評価が高くなり元気になっている．

⑤　県外で活動する山口県出身者より元気付けられたと聞き及んでいる．

⑥　県外に山口を紹介する手段となり，観光パンフレットやイベント紹介などを全国に発送している．

以上のようにコンテスト実施によって，地域文化および産業の活性化のための成果は上がっている．一方

でコンテストで参加する作品の傾向として，文化的，芸術的な個性が強い作品が多く，オリジナリティに富んでいるが，ＩＦＦへの参加においての経験からも，少量工場生産をする段階で，難しい問題も生じて来ている．つまり，迫力がありすぐれた作品は１点ものには向いているが，量産をする場合には，製造時間，人件費，コストの面で商品化がむずかしいのである．

産業振興をまず第１に掲げているコンテストとして，企業が教育に求めている具体性や社会性，即戦力化を考えると，今後のコンテストのテーマ設定などに課題が残る．このような矛盾は，ファッションそのものが内包する多様性にも起因していると考えることができる．つまり，デザイナーのコレクションではそれぞれの作品が芸術性を持つが故に，個性が発揮されオリジナリティが評価される．手工芸的要素が強ければ強いほど，個性が発揮されやすいが，量産化はむつかしい．最近のプレタポルテの一つの傾向に，手工芸的な要素を多用するということがある．パリのクチュールの技術に頼るというのではなく，コストの安いアジアや東欧などに発注することがある．

日本で製造するためには，高い技術によって支えられた付加価値が与えられ，ハイコストのラインでビジネスをして行く必要がある．しかし，あくまでも量産化できるものという，高いハードルを課されている．こういった問題を解決するためにも，我々が取り組んでいるコンテストが，それに答えるようなコンテストとなる必要がある．

直接的な解答がこのコンテストで得られると考えるのは，あまりにも穿ち過ぎだが，コンテスト実施を通じて，関係者とともに考え，自らの産業振興のさらなる発展のために継続をして行きたいと考える．

（文責：岡部）

XI　まとめ

山口県立大学大学院は，始めに述べたように「やまぐち文化発信ショップ事業」を経過して，５年目を迎えた．この事業の延長線で，有志の投資によって「有限会社ナルナセバ」が４年目に誕生した．商品開発のメインテーマを「サビエルと大内文化」にして来たので，2003 年の６月に大内文化の中心地，大殿大路に場所を移した．ここで，大学院国際文化学研究科のサテライト研究室が併設され，学生がここで会社運営にも参加している．

2003 年度から，学部の授業において岡部氏の指導下で，衣造形実習の工場制作が実現した．これは大学にとっては大きな成果である．現代の衣服のほとんどが，工場生産であるが，本大学では十分に工場と同様の設備や技術指導は出来ていない．もちろん，同じ設備を備えること自体が，不可能なことである．従って，実際に工場で研修をすることは，学生にとって非常に貴重なことである．さらに，紙面の関係上ここで多くを触れられないが，単に設備や技術の問題だけでなく，プロの仕事に対する厳しさや特に時間に関する観念など，学生がプロの世界を体験できたことは貴重である．それは，学生の工場での制作現場での集中した表情を見るだけで十分理解できる．

このような産学連携の活動の積み重ねが，一つずつ形を成して来た．遅々としてはいるが，前進していると考えてよい．ファッションコンテストでの受賞からインターナショナルファッションフェアへの参加，そして百貨店での販売という一連の流れに，当大学大学院生が参加できたことは，大きな成果である．

最後に，ファッションコンテストのために，筆者が客員教授としてたびたび訊ねているヘルシンキ芸術デザイン大学の学生を招待して，国際的なデザインワークの比較を広く示すことが出来た．当大学の学生のみならず，広くコンテストに参加した学生や関係者からも「よい刺激を受けた」という反応を得て，実行委員会としてもこの取り組みが評価された．

このような山口県における産学共同の活動の一つとして，上記コンテストが一定の認知をされて来た．2006 年 11 月には山口県が国民文化祭を引き受けることが決まっている．この際に，山口県が主体的に実施する分野の中にファッションショーがあり，現在山口市にて開催が決まっている．産学共同のジャパンファッションデザインコンテスト IN 山口を基盤にして，山口ならではのコンテストを柱に，例年では実現がむつかしいシンポジウムや展示なども考えている．特に，2005 年度までの上位受賞者を招待し，登竜門をくぐり抜けた若者のその後の活動をも確かめ，さらに応援して行きたいと考えている．

筆者はこれまでの上記コンテストのコーディネータあるいはショーの演出家として，コンテスト全体の企画や実施に係わってきた．産学協同の実践的研究を通じてこの４年間に産業界のことを多く学ぶ機会ができて，非常に有意義であった．同時に，大学だけでは得られない人脈が出来た．今後，今までの経験を生かして，国民文化祭では山口県らしいファッション部門を作りたいと考える．

最後に，この当コンテストの根幹を支えて下さって来た審査委員長の毛利臣男先生，審査委員の我妻マリ先生そして大鳥居幸男先生に感謝申し上げます．国際的な視野に立って，芸術的，造形的視点，モデルという着る側からの視点，さらにモードの視点などそれぞれの先生方のお立場を生かしながら，審査を頂きました．瑞々しくエネルギーに満ちた作品が毎年多数寄せられ，激戦の結果，大賞が決められています．今後さらに全国の応募者の斬新な作品を期待するとともに，感動をコンテストの参加者とともに共有したいと思います．（文責：水谷）

注

（１）平成15年６月産業構造審議会　繊維産業分科会基本政策小委員会編　「日本の繊維産業が進むべき方向ととるべき政策（案）」　経済産業省ホームページ　３－８頁．

（２）平成14年度中小企業総合事業団繊維ファッション情報センター編　「繊維産業グローバル展開調査分析報告書」中小企業総合事業団ホームページ　７頁．

（３）前掲書（１）　８頁．

資料１　審査員紹介

毛利臣男（空間演出家）
TOMIO　MOHRI

空間演出家．空間と動きの相互関係を様々なメディアを通して創作し，あらゆる人とその環境を包括するアーティスト．国内外におけるオペラ，バレエ，スーパー歌舞伎，能，現代劇などの美術や衣装デザインを手掛けると同時に，様々な空間展（展覧会）の美術監督としてもその斬新な空間作りで高い評価を得ている．主な仕事に「AMATERASU」（ロンドン／2001年），「モーリの色彩空間 Part １～６」（1997年～2003年），「毛利の服」展（東京／1986年，京都／大阪／2000年），「モードのジャポニズム」展（東京／1996年），「ISSEY MIYAKE　AUN」展（パリ／1988）がある．

我妻　マリ（ファッションコーディネーター）
MARI　AZUMA

ファッションコーディネーター．1968年資生堂化粧品のイメージモデルとしてデビュー．広告写真及び，ショーコレクションモデルとして活躍．1978年イッセイ・ミヤケスタジオにコーディネーターとして参加．ペルマネンテにおけるトータルコーディネイト，イメージプランニング，展示会及びコレクションの演出，スタイリングなどを手掛ける．以後アドバイザー，ディレクター，講師として活躍．1996年「ファミリー・インナー・オーシャン（F.I.O.）」設立．若きクリエーターを育成し，自らモデルとしても活躍中．

大鳥居　幸男（ファッションデザイナー）
YUKIO　OOTORII

ファッションデザイナー．フリーランスとしてＣＭや広告などのコスチュームデザインを手掛ける．その後（株）アバハウスインターナショナルに入社．「アバハウス・ドゥヴィネット」チーフデザイナーに就任．1997年，「0・918・OOTORII」を立ち上げパリ・プレタポルテコレクションにデビュー．2002年，ハイクオリティなキャリアブランド「ｑｕａｌｉｔｅ」（カリテ）の立ち上げと共に同ブランドのディレクターに就任．主な仕事に「SHADOW（影）」（パリ／2000年～2001年），「HAPPINESS」（パリ／2000年），「箱・展開図」（パリ／1999年），「禁断の毒」（パリ／1998年～1999年）など．

資料２　受賞者一覧

第１回山口新人ファッションデザインコンテスト
　大　賞　佐賀はるな　防府高等学校
　準大賞　大野郁子　広島ファッション専門学校
　準大賞　川下優香　厚狭高等学校
　審査員特別賞　小林利彦　名古屋モード学園

第２回ジャパンファッションデザインコンテストＩＮ山口
　大　賞「地層」天元　誠司　香蘭ファッション専門学校
　準大賞「ＯＮＥ　ＰＥＡＣＥ」上田　忠

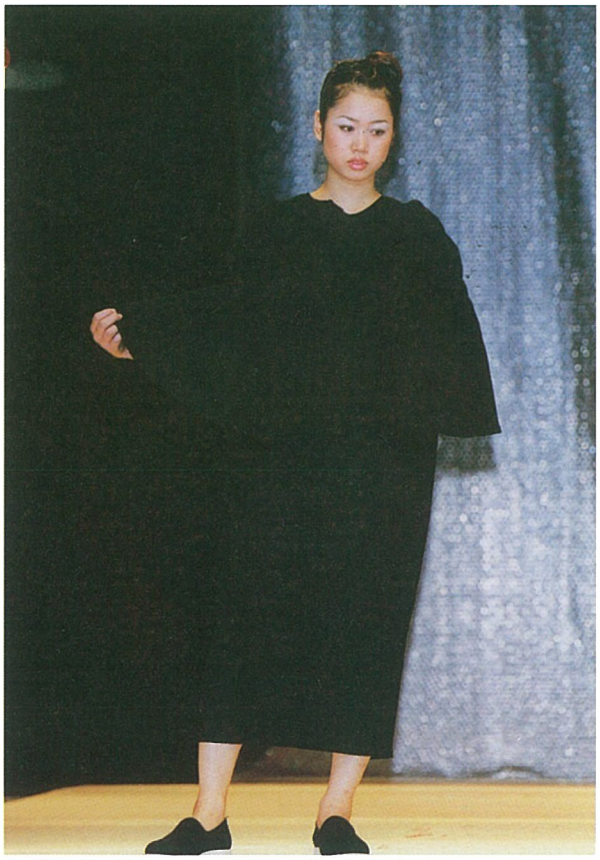
大阪モード学園
準大賞　「禁を侵す」　黒川友二
上田安子服飾専門学校
審査員特別賞　「開花」　山崎忠道
山口県立大学大学院

第３回ジャパンファッションデザインコンテストＩＮ山口
大　賞　「変身」　下潤佳代子
北海道ドレスメーカー学院
準大賞　「常識の破壊」　池上大祐
大阪文化服装学院
準大賞　「ボタンホールの革命」　林　利行
カナン洋装店勤務
審査員特別賞　「オペラ」　小松智子
小井手学院広島ファッションビジネス専門学校

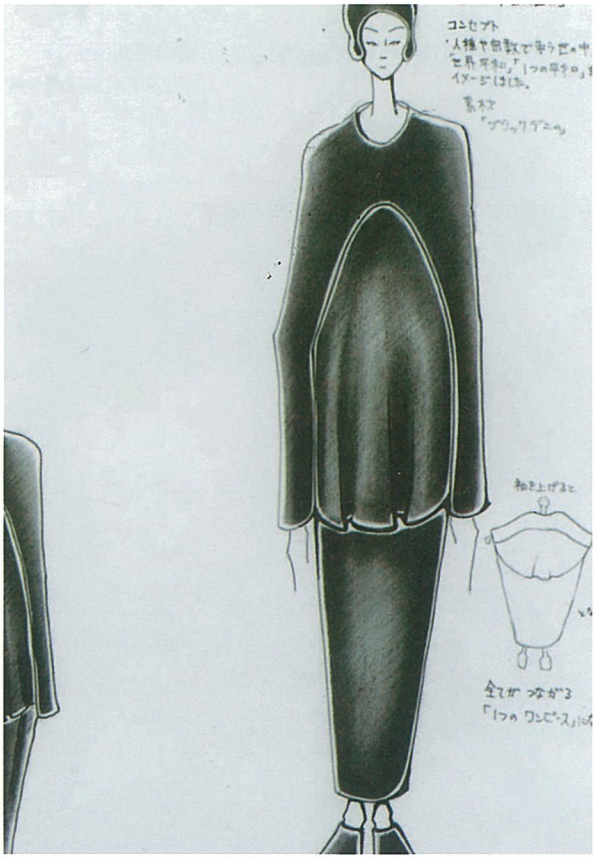
第４回ジャパンファッションデザインコンテストＩＮ山口
大　賞　「束縛」　佐々木亮太郎
京都造形芸術大学
準大賞　「人間の内面にもっている気持ち」
池田祐一
石田あさきトータルファッション専門学校
準大賞　「現代生け花」　前山　淳
フリーデザイナー
審査員特別賞　「素材 1505」　瀧口淳也
上田安子服飾専門学校

1．第２回ジャパンファッションデザインコンテストＩＮ山口
大賞「地　層」天元誠司

「地　層」のデザイン画



2．準大賞「ＯＮＥ　ＰＥＡＣＥ」上田 忠

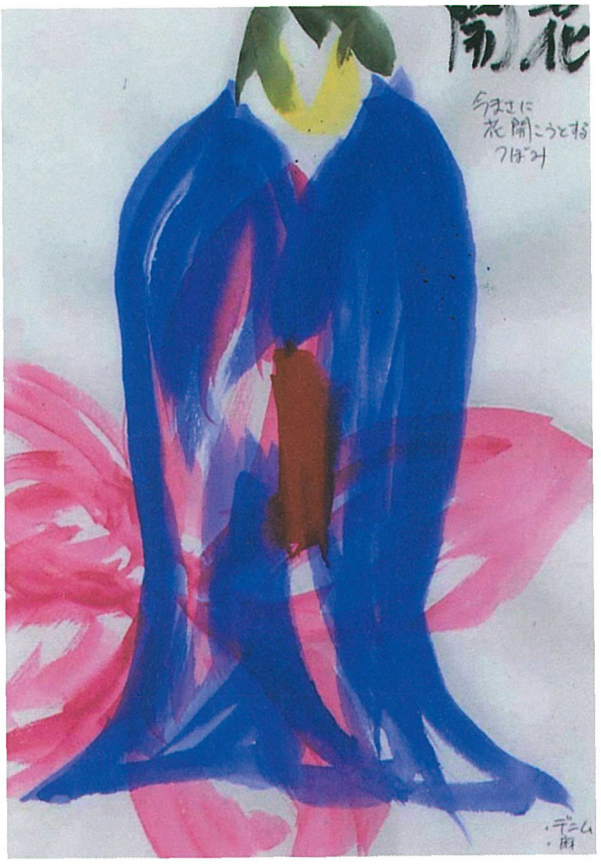


「ONE PEACE」のデザイン画

3．準大賞　「禁を侵す」　黒川友二

「禁を侵す」　のデザイン画

4．審査員特別賞　「開花」　山崎忠道



「開花」　のデザイン画

５．第３回ジャパンファッションデザインコンテストＩＮ 山口
　大　賞 「変身」 下潤佳代子

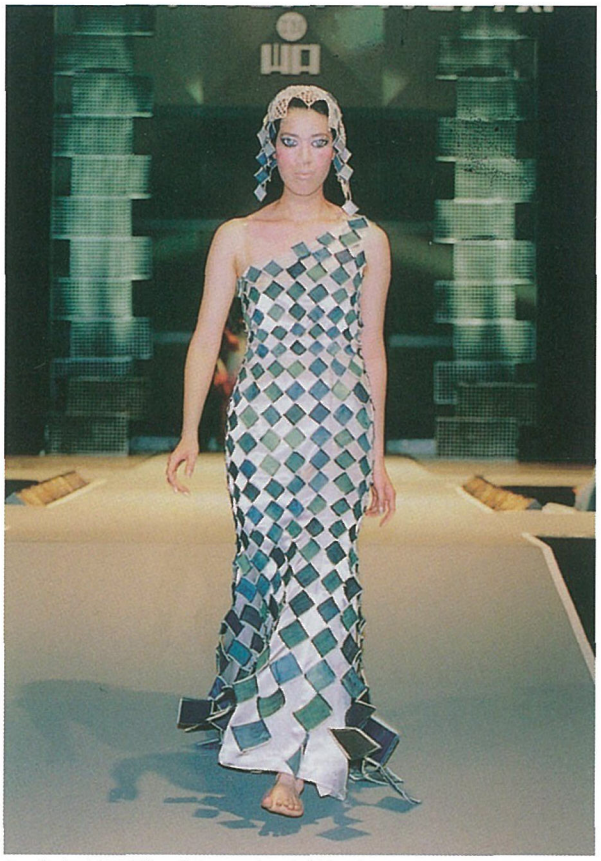
「変身」 のデザイン画

６．準大賞 「常識の破壊」 池上大祐

「常識の破壊」 のデザイン画

7．準大賞 「ボタンホールの革命」 林　利行

「ボタンホールの革命」 のデザイン画



8．審査員特別賞 「オペラ」 小松智子

「オペラ」 のデザイン画

９. 第４回ジャパンファッションデザインコンテストＩＮ山口
　大賞 「束縛」 佐々木亮太郎

「束縛」 のデザイン画

10. 準大賞 「人間の内面にもっている気持ち」 池田裕一

「人間の内面にもっている気持ち」 のデザイン画

11. 準大賞　「現代生け花」　前山　淳

「現代生け花」　のデザイン画

12. 審査員特別賞　「素材1505」　瀧口淳也

「素材1505」　のデザイン画

13. ＪＦＤＣの第８回インターナショナルファッションフェアＩＦＦ参加ブース　2003年７月（パシフィコ横浜にて）
左からデザイナー（テーマ）：下潤佳代子（Peace），林　利行（Strong），リンネ・ニイニコスキー（History），ナオト・ニイドメ（Function），山崎忠道（Resistance），おおうち あみ（Reconstruction）